大原特別集会

キリストの本願
――マルコ伝第12章28～34節――

１９６４年11月23日
小池辰雄

神の国の実現　神の本願　無我の我　聖霊のバプテスマ　天国の道　愛は魂の爆発　文化の本当の根底

【マルコ12・28～34】

28学者の一人、かれらの論じおるを聞き、イエスの善く答え給えるを知り、進み出でて問う『すべての誡命のうち、何か第一なる』29イエス答えたもう『第一は是なり「イスラエルよ聴け、主なる我らの神は唯一の主なり。30なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」31第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大なる誡命はなし』32学者いう『善きかな師よ「神は唯一にして他に神なし」と言い給えるは真なり。33「心を尽くし、智慧を尽くし、力を尽くして神を愛し、また己のごとく隣を愛する」は、もろもろの燔祭および犠牲に勝るなり』34イエスその聡く答えしを見て言い給う、「なんじ神の国に遠からず』此の後たれも敢えてイエスに問う者なかりき。

●神の国の実現

私はこちらにお伺いする前に、創世記から申命記まで通読してまいりました。時々、そういうちょっと奇抜なことをするんですが。随分昔に私は旧約をずっとかなりやってまいりまして、近頃はすっかり旧約にお留守になって、福音書ばかり読んでいるものですから、昔のことを思い出して、読んだわけです。口語訳聖書というものを知らないものですから、口語訳というのはどんなものかと思って、口語訳で読んできた。ところが、さっき言ったような、感心しないような訳し方をしているのがずいぶんあって、おやおやと思った。たとえば、「せよ」というような命令形で書いてあるのに、「しなければならない」というような、そんなまだるっこい訳し方をしばしばやっている。まぁ、それはそれとしまして、旧約聖書の申命記7章を開きますと6節に、

「6其は汝は汝の神エホバの聖民なればなり。汝の神エホバは地の面の諸の民の中より汝を擇びて己の宝の民となしたまえり。7エホバの汝らを愛し汝

らを擇びたまいしは汝らが万の民よりも数多かりしによるにあらず、汝らは万の民の中にて最も小さき者なればなり。8但エホバ汝らを愛するにより、また汝らの先祖等に誓いし誓を保たんとするに因りてエホバ強き手をもて汝らを導きいだし、汝らをその奴隷たりし家よりエホバの 王パロの手より贖いいだしたまえるなり。9汝知るべし、汝の神エホバは神にましまし真実の神にましまして、之を愛しその誡命を守る者には契約を保ち恩恵をほどこして千代にいたり、10また之を悪む者にはてきめんにその報をなしてこれを滅ぼしたもう。エホバは己を悪む者には緩やかならず、てきめんにこれに報いたもうなり。11然れば汝わが今日汝に命ずるところの誡命と法度と律法とを守りてこれを行うべし。」（申命記7・6～11）

イスラエルの民が選ばれたのはイスラエル側ではなかった。彼らが大きな大民族であるということでなくて、いとも小さいものであり、また別なところには、

「お前たちは誠に頑のこわい頑なな民である」

と言って、神さまが選ばれたのは、彼らの数によるのではない。また、彼らを選ばれたのは、アブラハムに言われたように、それをただ幸いにするということだけではなくて、それを通して万の民を幸いにするためである。そしてまた、預言者を通しては、

「私は自分の栄光を何者にも与えない」

と言っておられます。

イスラエルをまず捕まえて、救いを人類に及ぼそうとされたところの神の本願です。それはみな、神の御意通りの祝福された民にし、神の国を実現せんためであるというのが、これは創世記から黙示録に向かっての偉大な神の目的論的な終末的な目的をもったところのご経綸です。神の国を――人間の国ではない――神の国を実現するための大きな驚くべき歴史の、神さまは今その道程にあられる。私たちの人生観というようなものは、この神中心の、神の目的論的な、そういった角度で大きく掴んでいかなくてはいかん。一体、クリスチャンというものは、もう少し気宇を雄大にしなくてはいかんと思う。ただ教会問題ばかりやっている。そんな小さなことではないので、神さまの大きな偉大な国を実現するという大きな目的をもっている。

気宇の偉大さということ。それから、それを実現していくところの事態はごく手近な、ごく身近なことから、もちろん始まるのでありまして、また、その身近なことだけで終わったって構わない。それは決して、小さな意味における身近ではなくして、雄大な性格にひとつとしてもはずれることのできない身近さである。そういう具体的な小さなことと、神さまの雄大なこととが決して矛盾するものではなくて、実にその雄大なものがあるからこそ、我々は本当に身近なことに真剣に立ち向かって、それがどんなに中途で終わるようなことがありましても、決して気落ちすることなく、神の偉大な目的に参与するものである。

こういう角度の気魄にならなくてはいかんと思う。

●神の本願

イエス・キリストは、その生涯が一体何であったか。一言で言いますと、

「**汝の御意（みこころ）をなさせたまえ**」

です。それは「主の祈り」でどのクリスチャンもみんな知っている。

「**汝の御意をなさせたまえ。御意の天になる如く地にも成らせたまえ**」

というので、「御意の天になる」というのは、

「汝の御意が、神さま、あなたの国で成っていますように、この地上においても、この我らを貫いて成してください」

ということです。イエスは自分を提身して神の御意を体現していこうとされ、またそれをして行かれた。

私が今日、ここに「キリストの本願」と書きましたのは、神の本願に沿って生きたのがキリスト・イエスである。イエス・キリストは神の本願に――これは仏教の世界以上に――この神の本願に生きた。そして、神さまの本願というのは決して空願ではない。実力をもってキリストに、イエスに神さまはその驚くべきプレローマ、満ち満ちたところの神性をもって、神の実力ある性をもって、内容をもって、キリストにかかってこられた。イエス・キリストはこれを受けとって、いつも申し上げているとおり、

「**自分は何者でもありません**」

というのがキリストの根本的な自覚でした。

とかく、若い方は仕方がないですよね、ある意味において。それはそれでもいいんですよ、

「私たちは自由であって、自己というのがどうかなってしまったら、おかしくなってしまう、キリスト教というのは何か意気地（いくじ）のないようなもので、己を棄てたらどうなってしまうか」

なんて思う。ところが、イエスという人を見てください。この驚くべき人物は、世界中にイエスにかなう人物はないですよ。世界中のどんな人物をもってきても――イエスの他に一番大きいのはお釈迦さんでしょう――お釈迦さんをもってきたって、それはイエスにはかなわんです。イエスというこの人物にぶつかって、この驚くべき方が、

「**私は何者でもない**」

と仰った。「善き先生」と言ったら、

「**なぜ、私のことを善きと言うか**」

と。片っ端から、自分が何者でもないということを徹底的に自覚し、そして、完全に神に自分を任せる。そうしたらば、彼は本当の我になる。即ち、別な言葉でいうと、小我を棄てたら本当の大我となる。

吉川英治の『宮本武蔵』の中に出てくる。宮本武蔵は剣道の道で禅宗をおさめたくて、一生懸命で尋ねる。ところが、あの禅坊主の沢庵が一向答えてくれない。それで、いい加減、業を煮やして、

「もうしょうがない坊主だ」

と思ったんでしょう。けれども、ある時、彼は武蔵が立っている所の回りに円を描いて、何も言わないで行ってしまった。見たら、円が描いてある。中心に宮本武蔵が立たされて、その回りに円を描いて、その坊主は行ってしまった。

「これを悟れ、わかるか」

というわけだね。

●無我の我

即ち、この中心に我というものが立っている。円は無限を表す。半径を無限大にすれば、円は無限でありまして、無限と完全の象徴なんです。無限にして完全なるものを表そうとしたら、円より他に表せない。この宇宙もまたそのようなものらしい。そういう無限にして完全なもの、これを「梵（ぼん）」という。即ち、梵と我とが一如。この梵我一如の世界に入れということです。宇宙の大霊というものと、我というものが一如の世界に入る。そのためには、この我というものが小我であったら、その中心になれない。本当にこれが大我ということでもって、この梵と我が一つになる。この我は無我の我です。我無き我です。無我の我、我無き我、無心の心、心無き本当の心、無我の我である。

イエス・キリストが完全に神の前に自分を投げ出して、己を神の中に棄てた。己を神の中に本当に棄てて我無しという――

「私は何者でもない」

というのは無私、私無きということ――私心のない世界に澄みきったときに、この我というものは素晴らしい我です。これは「神の似姿」の我なんです。

端倪（たんげい）すべからざるところの神さまは、

「人をその似姿に造った」

とイスラエルの神話では言っている。初めの方にそういう神話がある。外側を考えて、

「神の似姿はどんな姿でしょうか」

と、昔の人は「似姿」というものを何かそんなように考えたかもしらん。そんなことはどうでもいい。問題は、そういった神話的な表現でもって何が言われているかということです。即ち、霊的な、魂の霊的な我というものが神の姿になる。私たちは本来みんな、神の姿になって造られているんですから。どんな悪人といえども、みんな五十歩百歩です、みんな神さまのものです。小さな幼児をみて、誰がこれに「この野郎」なんて言うか。小さな幼児を見ればみんな「よしよし」と可愛い。

「よしよし、かわいい」

というのは即ち、これは神の似姿をとにかくここで、ある意味において映しているから。それで、誰も幼児を憎む人はないはずです。

それが、知らないまに、いわゆる我が生じてくるから、お互いにどうのこうのと世界中、社会はいつもゴタゴタしている。社会がゴタゴタし、国際関係がゴタゴタして、極まるところは戦争だ。血なまぐさい歴史が続いているというのは、要するにこの我がもたらしている。我が本当に無我の我となって澄んだときに、それが即ち神の似姿である。梵我である。そして、お釈迦さんがそういう世界に入って、如来の法身的なものになる。「法身」とか「報身」とかいわれる世界です。そういう世界にお釈迦さんも入ったわけです。

だから、キリストは、

「神さま、あなたの御意がどうぞ私に成って、私をそのようにしてください。あなたのご本願の如くに私を形成してください」

と祈られた。「人間形成」なんて言うけれども、人間が自分で形成しようとしたって、それはダメですよ。

「神さま、あなたがお造りになろうとなさるように、そのように私を素直に造ってください」

と。即ち、本願に沿って、神の本願を直に受けて、それを体現していったのがイエス・キリストである。もうはっきりしてます。神さまの本願を本当にひたむきに受けとって、そして、これに添った。

●聖霊のバプテスマ

イエス・キリストはどうですか。洗礼のヨハネが水でバプテスマをするときに、キリストがやって来たから、

「あなたは道徳的な悔改めをする必要のない人ですのに、なぜ、私のところへいらっしゃったか。私があなたに、むしろ逆に洗礼していただかなければならないのに」

と。キリストは、「いやいや」と言って、その悔改の洗礼を、水の洗礼を受けられながら、実は「我々の弱き」を全部自分が背負って、そして今度は、聖霊のバプテスマを自らそのヨルダンの川で受けた。イエス・キリストが水から上がってくれば――キリストは水に浸るときに、自分を本当に葬る。水の中に自分を葬ってしまう。自分を本当に我無き世界に入れてしまった――そうしたらば、上から神の霊が臨んできた。聖霊が臨んできた。異本には

「聖霊 滝の如く」

とある。聖書には

「聖霊 鳩の如く」

といって、彼の中に臨んでくる。霊界では、鳩ではないけれども、サーッと降りてくるような、そういうひとつの霊的な現象というものは現象するんです。決して想像して書いているのでも何でもない。

そして、天から声がして、

「汝はわが愛しむ子である。我なんじを喜ぶ」

と。これは私たちでも、祈りの世界で、またあるときは道を歩いていても、忽然として何かしらんけれども、御言が響いてくるということはあるわけです。

「汝はわが愛しむ子である。我なんじを喜ぶ」

とは、キリストは神さまに愛しまれ喜ばれた時はどういう時かというと、完全に無我な時でありました。聖霊が臨んでくるその無我の時です。もちろん、彼は平常からしてもう既にそういう方でしたが、これからいよいよ伝道に向かう、その前にサタンと一騎打をする。その前の準備態勢において、やはり彼は私たちと同じ弱き肉を――ロマ書8章3節に書いてあるとおり――その弱さを背負いながら、その弱さにおいて完全に勝つという道はどこにあるかというと、御意と同時に御力です。神の御意を本当に受けるところには、これは御力が同時に来るんです。御意というものは観念ではないですから。神さまが意志して為さんとすることを受けとるときには、同時に力が来る。それで、彼は神の愛、実力ある生命を持ったところの神の愛を、御霊を――御霊は愛の霊ですから――これを受けとられて、そして、サタンに立ち向かう。

サタンに立ち向かわれた時も、いつも、神の本願に従っていた。自分が霊に満たされたからといって、神さまを試みてはいかん。この霊的な力を私して、

「お前、飛び降りてみろ」

と、サタンが乗じてきたわけです。あれは霊において連れていくわけです。そういうところがエゼキエル書にも書いてある。サタンが、

「山の上からお前は落ちてみろ。そうしたら、神さまは

詩篇の言葉を使ってね、

天使を遣わしてお前を石にぶつからないようにする。そう書いてあるではないか」

と誘った。イエスは

「なぜ、そういうことを言うか。神を試みてはいかん」

と。神さまが本当に救おうとなさる時には、救いたもう。こちらが神さまの霊的な力をどうこうするということではない。どこまでも、どのサタンの攻撃に対してもみな神を立てて、神の本願を立てている。本願は御旨です。神の御旨を、本願を立てて、キリストは戦われた。そこに本当の力がある。キリストはそのようにして神の本願に生き抜いた人である。

こないだ、私は木曽に行きましたときに、ある方からこういうお話を聞いた。その人のお母さんが山道を歩いていて、ふと崖から足を滑らして――下10メートルだそうです。10メートルというのは大変なものです。飛び込みでも10メートルというとちょっとこれは飛び込めないよ。私も10メートルはちょっと難しいかと思う。5メートルならできるでしょう――その10メートルの所から落ちた瞬間に、

「主さま！」

とその人は呼んだそうです。この人は普段から信仰のある方です。そうしたら、そこへ落ちて、何かかすり傷したっきり。10メートルの崖から落ちたら、たいてい参ってしまう。それがかすり傷ひとつでもって、生命は助かった。もう、そのひとつの体験からして、いかに――神さまを試みたのではない――本当に神に依り頼んでいるときに、そのようにして神さまは助け給う。

いつも、イエス・キリストは神の本願に生きられた。神の本願はどこまでも、己を投げ出す者を神の似姿にしていく。また神の国を現象するところのその器にしていく。そして、神の国をそこに建設していく。

「天国は近づきたり」

というときに、イエス・キリスト自身が天国体であるから、「天国は近づいた」と仰ったんです。

「天国は汝らのうちにあり」

とは、イエス・キリストの本願を私たちが受けるならば、私たちが即ち天国体になっていく――現にそうである――というところに端的に来なくてはいかん。

「もう少したったら行きます」

ではない。端的に「今すぐここに直ちに」という、そういう世界です。

「己を棄てよ」

神の本願を受けて行ったこのイエス・キリストという驚くべき人物を見て――これは世界に比類のなき事態である――その比類なき人は、何か天才かと思ったら、何でもない。絶対無条件の世界である。そういう絶対無条件。イエスは大工の息子で、素人ですよ、どこから考えたって。ところが、この素人のイエスという人物が、教法師や祭司を相手にしてケタが違う。

それはパウロが言っているとおり、自分の今までの知識や義なんていうものは塵芥（ちりあくた）としてパウロはみなした。パウロはいわゆるチャンピオンですよ、人間的にいって。道徳的にもまた文化的にいいましても、パウロというのはそういう器です。だけれども、

「それはダメだ。みんな棄てろ」

というのが、キリストが迫ってきたところの事態です。ところが、イエス・キリストはこのパウロをひっくり返したあとで、自分を誇っていたそのパウロの生まれつきの才能を今

度は、逆用なさるわけです。そして、本当のそれを伸ばし給う。

「棄てろ」というのは、自己のものとしているから、どんなに善きものも自己のものとしたら、それはダメだということ。人間の栄光を求めるものはみな滅びていく。神さまの栄光を、神の本ものを受けていく者は、本当にそれが神のものとして、これが展開して輝いていく。事業にしろ、学問にしろ、どんな他の事柄にしろ、みなそうである。

そのようにして、私たちがキリストの本願を受けとるときに、いわゆる人間形成とかいうのとはおよそケタが違った、質の違った本当の展開が来て、

「千万人といえども我ゆかん」

という本当の力がそこから出てくる。今までの小さな自由だとか、小さな我なんて、そんなものではないということを自分で体験してみなければ、そこの中に自分を投じてみなければこれが掴めないし、投じてみたらばそれが本当だったということを必ず告白なさるに違いない。

しかも、先程申し上げたとおり、

「己を棄てよ」

とは実は棄てられてあった。イエス・キリストの十字架において、我というものは棄てられてあった。それでなくて、どうして私たちは自分を棄てることができるか。この「棄てられたる自己」に気がつくからこそ、「だから、棄てよ」と言う。「棄てよ」というのは今度は、

「棄てることができるぞ」

ということです。「我を、己を棄てよ」ということは、キリストが、

「私がお前を棄ててやったんだから、お前は私の中に入って十分楽に棄てられるよ。自分なんかにこだわっていたら、ダメになることが分かる。いよいよ棄てて行くことができるね」

ということです。

「そうです、こんな嬉しいことはありません。もし、私は自分を立てるのだったら、苦しくてやりきれません。自分を投げ捨てているからこそ、本当に私は力が出てきました。ありがとうございます」

と。何と言ったって、これはしょうがないですよ、福音だから。福音というのはそんな素晴らしい力を私たちにくださる。神さまが私たちの中に、御霊をもって来たら、それは原子核爆発どころのさわぎではない。私たちの中の「ウル・クラフト」（原始力）、キリストの「ウル・レーベン」（原始生命）というものはもの凄い爆発力を持っている。霊界の力というものは物理界の力よりか遙かに素晴らしいものを持っている。それだけのものを信受、体受しなかったならば、信仰なんて言ったって、五十歩百歩で、つまんないです。

どうか、皆さんは、一人びとりがそのように――今晩は人数が少なくてよかったですよ

――少ないからこそ逆比例して、いよいよあなた方にその力はかかってくる。本当のことはみな、一人を通して行く。

「この一人びとりは全世界とも代えることができないぞ。この生命を失ってどうするか」

とキリストが言われたではないですか。あなた方のその生命は全世界とも代えることのできないように、神さまは一人びとりを造っている。絶対のものとして造っている。一人びとりはバラバラである。そんな絶対のものでありながら、このキリストの本願の劫力が――「弥陀の本願の劫力（ごうりき）」という言葉があるけれども――この本願の劫力が入ってくれれば、お互いにここのところは生命の霊であり、愛の霊ですから、皆さんは、お互いに還流（環流、貫流）するんです。これを受けとって、還流して祈っていく世界は、もの凄い祈りの世界に入れる。これをして、皆さんがスクラムを組んでいらっしゃったら、必ず伸びていく。

私も誠にまだ申し訳ない事態でございますけれども、私のこれからの生涯もそのことのためにある。本もののクリスチャンを本当に、神さま、つくってくださいと。そうしたら、孔子ではないが、

「千万人といえども我往かん」

ということになる。実際、往けるんです。私は正直、大言壮語でもなく、全無教会を相手にしてビクともしないです。みんながらシャットアウトされても、何だと。

「君たちは、内村先生や藤井先生あたりに火花していたものをみんな消してしまった。内村先生や藤井先生はいくら無教会の偉大な先生でも、パウロやヨハネやペテロの、この使徒たちの次元に比べたらまだ低い」

と。こんなことを言うと、

「傲慢だ」

なんてすぐ言うかもしれないけれども、本当にそうです、傲慢でも何でもない。もうこの世界に来れば分かる。

キリストの霊が、御霊がパウロの中に宿って、パウロは今までのものをみんな塵芥としてすっ飛ばしてみたら、パウロは今度は逆に、そういったものをも全部、キリストにおいて善用されることになって、驚くべき重厚な構造を持ったこの福音がパウロによってどっしりとできあがった。何といっても、パウロがここに建設せしめられたところの、パウロ書簡に表れているところの、福音の事態は驚くべき健全さと重厚さを持った、限りなきものをここに映している。もちろん、福音書のキリストにはかなわないけれども。それはキリストの証人だから。

●己が十字架を負え

そういう意味において、パウロは本当にキリストの本願を受けとった。私たちもまたこ

のキリストの本願を本当に受けとることです。そうなってきたら、

「己が十字架を負いて我に従え」

という、「己が十字架を負う」ことができる。イエス・キリストは十字架を負った。キリストの十字架は贖罪の大愛をもった十字架であって、私たちのとはケタが違う、質が違う。しかし、パウロが

「その十字架の一端を担う」

というようなことを言いましたけれども、私たちは神の国を建設していく。そして、この世を担う、負う。もう、人を押し退けたり、審いたりすることではない。全部これを担い上げる。アトラスみたいに。私たちが本当に世の人たちにどう言われましょうとも、キリスト者にどんなに誤解され迫害されましょうとも、キリストの救いが来たらば、世を救わんとするこの本願が来たらば、パウロが

「責むる者のために祈れ」

と言ったように祈らざるを得ない。

「初めに言(ことば)あり。言は神と共にあり。言は神なりき」

というあの「言」は別に「言」ではないですよ。「初めに愛あり」と言ったっていい。

「初めに神の愛あり。愛は神と共にあり、愛は神なりき」

と。要するに、あれはキリストですから。キリストという愛の権化です。世の中にキリストの愛よりも力強い愛は天上天下いずこにもない。あの大英雄のナポレオンがセントヘレナに流されて、やっと我に返ったときに、

「ナザレのイエスは私に勝った」

と言った。どんな英雄もとてもイエス・キリストにはかなわない。

このキリストは実に、彼自身が

「我は柔和なる者である。羔羊(こひつじ)である」

と言われる。ところが、

「羔羊(こひつじ)の怒(いかり)」

という言葉がある。羔羊の如き柔和なものの中に実は本当の力が宿っている。全然これは矛盾的な事態ですが、それは事実そうなんです。英雄というならば、イエス・キリストほどの英雄はいずこにもない。とにかく、全部の者に十字架にかけられて、

「彼らを赦せ」

と言うような驚くべき愛は、これは最大の英雄の言葉です。本当の英雄の言葉です。その御霊を受けたから、ステパノは同じく祈ることができました。また、世々の殉教者たちが本当にキリストの愛に満たされたときには、お母さんも小さな乙女も十字架にかけられながら讃美して逝ったという。これは本当の、いわゆる英雄よりも遙かに素晴らしい力です。

だから、

「愛は一切に勝つ」
というのは、愛は一切を担い上げていく。「己が十字架」、即ち自分が本当に架せられたところの、ひとつの神の国のための任務、それが十字架です。神の国のための神の本願を受けとるところの内容、私たち自身が神さまから受けとっている本願がある。キリストから受けとっているところの本願がある。その本願を受けとめて――それは人にとって辛いことでありましょう――しかしながら、イエス・キリストのこの御霊の愛の力が来ているから、己が十字架を負える。
「私が必ず負わせてやる。そして私に従って来なければいられないようにしてやる」
というわけです。
福音の世界は――「止むを得ざるなり」「止むにやまれずして」と、パウロが「アナンケー」という言葉を使っている――この
「止むにやまれずして」
行くような世界であって、
「何々しなければならない」
なんていう訳し方をされたら、迷惑な話ですよ。「しなければならない」という言葉が非常に多いですね、今度の口語訳聖書は。困るよ、この「ならない」は。道徳の戒めみたいで。そうではなくして、
「かくせざるを得ず。そうできるぞ」
と、大胆に私は聖書をいつか訳したいと思っているくらいです。
「そんなのは文法的にまちがいだ」
と言われたって構わない。本当はそうだよと。神さまがモーセに言われた、
「我は有りて在るもの」
は、
「我は有りて在らしめるもの」
といつも申し上げているとおり、神さまは「在る」ことが他をして「在らしめる」在り方である。私たちクリスチャン一人びとりが、本当にその人が在るということが、周囲を在らしめているところの在り方です。
人生には、皆さん、いろんな課題や悩みをお持ちでしょう。それでもいいですよ。どうか、その解決は神さまに全部任せて、未解決のまま、未解決の奥に、
「どうなってもいい。神さま、私はあなたの本願を受けとることが一番楽しいです」
という人にならなくては。
「天上天下何をか慕わん。汝のみ」
と、詩篇73篇に書いてある。そういった、
「天上天下汝より慕うものなし」

という、そういうところは即ち、さっき読みましたところの、

「**心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主たる汝の神を愛すべし**」

というのだが、それは、

「私がお前たちをかく愛しているではないか。事実をもって愛したではないか」

と。イエス・キリストは事実をもって愛し、そして、彼らを片っ端から、病める者は治してやり、苦しめる者には本当に平安を与えてやる。マタイ伝11章に書いてあるとおりです。

「わが荷は軽い。重荷を負っている者は私に来なさい。みな軽くしてやる。十字架は重いか。重くないぞ。大丈夫、私に来たらばそれよりも遙かに力強い力を与える」

と言われる。

「**我々に耐えざるところの試みに合わせたまわず**」

とペテロも言っているとおりです。ペテロ前書4章12節に、

「12**愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練を異なる事として怪しまず、13反ってキリストの苦難に与れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。14もし汝等キリストの名のために謗られなば幸福なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの中に留まり給えばなり。**」（ペテロ前書4・12～14）

栄光の御霊、神の聖霊が私たちの中に留まっていらっしゃれば、苦しいまんま――それはいろんな原因がありましょう、自分の側に原因があろうがいいよ、悪人正機である――何を心配するか。神さまは、ルカ伝15章にあるとおり、どんな申し訳ないことをいたしましても、神さまのところに「神さま、主さま」と言って赦しを乞うならば、絶対に

「お前はこんなことをしたじゃないか」

なんて言って咎めない。「よーし」と言って受けとってくださる。そういった一切の問題に対して無条件に受けとるものを、「十字架」と言います。どうか、皆さん、その問題の奥に問題でない世界があって、問題を担ってしまう。それをすっ飛ばしていく。そこには本当の平安がある。本当の願いがある。

●天国の道

何か環境や運命がよくなることを望んでいたらば、その時はいいかもしれないけれども、またダメですよ。ちょうど天気と同じだ。雲が来てはまた雨が降ったり、ああ今日はいい天気だなというと、翌日は暗澹たる天気になったり。雲の彼方に太陽がある。

「雲の彼方にもまだ太陽が輝いている」

という。その雲を貫いているところの太陽の光を、いや実に太陽そのものを、

「太陽を胸に持て」

という。イエス・キリストという御霊の太陽を胸に持つことです。

日本の国旗は私たちの実存を表していなくてはいかん。私たち自身が国旗の如く太陽を胸に持てば、キリストという太陽を胸に持てば、他のものは雲散霧消だ。真っ白に、白地になる。白地になって、あなた方一人びとりが日本の国旗です。日本の国旗は、何といったって、世界一ですよ。この国旗に比べられるものはない。日の丸ひとつ書いて、あとは白地である。こんな素晴らしい国旗を瞑想しないでどうするか。こんな素晴らしい国旗を「今日は立てるの立てないの」と、そんなことではない。毎日、日々好日でありまして、毎日、自分自身が国旗となって、そして、本当に

「光は東方より」

ということではありませんか。

自分なんていうものを考える必要はない。そうしたらば、そのようにして、現実の私たちはどんなに惨憺たるものであっても、惨憺たる者の中に、実に金剛石よりも素晴らしいこのキリストの御霊の陽が輝いている。これはいかなる嵐も熄(け)すことができない。

それはもう、「信仰で修業して」なんていう世界ではない。どうか、皆さん、くすぶらないでください。もう即刻、今、今日、この晩、ここにおいて、あなた方の中にそれが灯って、

「ああ、なんと私はもう楽になってしまったか。何も問題はなかった。いくら問題が来たって、もはや私はそんなものに支配されないところのものでございます。私はキリストにしっかり捕まえられてしまったものだから、仕方がないよ」

という、そういう世界に一遍本当に入ってください。そうしたらば、それはもう既に御霊の世界なんですよ。

聖霊のバプテスマというが、そのような境地に、こうやってあなた方はもう聞きながら、祈り心でそこへ入っていなくてはいかん。私は語りながら、祈り心で語っている。そういう世界に、私たちは集会ごとに現実に入って、そして進んで行くのを我々の集会という。お説教でも何でもない。私は

「お説教をせよ」

なんて言われたら、絶対にご免こうむります。そんなことではないんだから。そして、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」

とは、私たちは尽くさせしめられる。精神を尽くし、思いを尽くして、力を尽くして、主さまは私をかく愛してくださることが、イエス・キリストの本願であるんですから。そして、

「私はお前の中に住もう」

というのが本願であって、

「せっかく、十字架でお前はもう開かれているんだから、門が開かれているんだから、私はその中に入るよ」

と。キリストはもうちゃんと道を開きながら、本願をもって臨んでくるものを、なぜ、拒むか。拒む理由はどこにもない。拒んで、いずこに行くか。いずこに逃れるのか。逃れよ

うがない。そういう恩寵の圧倒的な世界に私たちは入れられている。

自分の問題であっても、家族の問題でも、あるいは友人の問題でも、次から次へといろいろありますよ。しかし、神さまはこの本願の力を、悲しめる者に喜びを与え、病める者を癒し、悩める者に本当に安らぎを与えることを、私たちを通して神さまは為してくださる。どん底の祈りをもって、その人に向かっていきなさい。十字架を負わなければ、本当に人を救っていくことができない。

イエス・キリストはそのようにされた。私たちはキリストと共に、この十字架の愛を――キリストの愛が即ち十字架なんですよ――キリストの驚くべき愛を、キリストの御霊の力をもって負うとき、

「己を棄てて己が十字架を負いて我に従え」

とは、なんと祝福された、これでなければ天国の道ではないという、これが本当の隠された輝かしき道であるということに気がつく。この文字を見ると、みんな恐ろしいですよ、「己を棄てて己が十字架を負いて我に従え」とは。たいていはみんな尻込みしてしまう。けれども、その奥にイエス・キリストの本願が実力をもってかかっているから、これでこそ、私たちは本当の天国の民である。福音は、それだけの迫力をもって、そこから輝きをもって、聖書の文字は私たちに迫ってくるわけです。

●愛は魂の爆発

これは賀川豊彦先生の言葉の一節ですが、

「病者に近づくものは愛だ。革命に近づくものは愛だ。罪びとに近づくものは愛だ。愛はとこしえに危険を犯す。危険を犯さないものは愛ではない。愛とは危険を犯すということだ。それを十字架とこそ言うのだ。愛は無から有を創造するところの意味だ。暗黒を光明に、罪びとを聖人に、地球を天国に鋳造することを愛というのだ。それは大いに飛躍する冒険性を持っている。愛とは飛躍するということだ。愛は魂の爆発だ。」

と。賀川さんというのは非常に、ときどき爆発するような文章を書く。内村先生もそうですけれども、賀川さんはまたそれ以上のものを、ある意味において持っている人です。

「弥陀の本願には老小善悪の人を選ばれず。ただ信心を要すと知るべし。その故は罪悪深重、煩悩熾盛の衆生を助けんがための願にてまします。

どんなに罪悪が重かろうが、煩悩が熾んであろうが、そんなものは心配いらん。それを助けるのが弥陀の本願だという。

しかれば、本願を信ぜんには他の善をも要にあらず、念仏に勝るべき善なかるべきが故に。悪をも恐るべからず、弥陀の本願を妨ぐるほどの悪なきが故に。」（歎異抄）

と。非常に福音的です。キリストも十字架上の盗賊に言われた。もうマイナスの何乗だかしらないような生涯を送ってきた盗賊が

「せめても、御国を来らせ給うときに覚えてください」

と心砕けて言ったときに、

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

と。これがキリストの本願です。これは弥陀の本願と同質です。神さまは、キリストは私たちの如何に拘らず、本当にこれを愛して――愛するとは相手を本当に救うことです――救いにもれるいかなる条件もないという。かくして、私たちが本当にキリストのこの本願を受けとって、私たちがキリストのもの、神の似姿にされていくことによって、この「己が十字架」を本当に背負って、キリストと共に神の国をここに建設していく。

地上は、世の末には信を見んや。我々の伝道や何かについて失望する。しかし、失望はいらん。どんなにそれが失敗の結果に終わろうとも、本当にこの本願によって生きていくならば、その人の生涯は決して失敗ではない。その人が地上を去ってから、どんな花が咲いて実が稔るかしらん。どうか、皆さん、この人生は決して地上だけが人生ではない。

私みたいなやつが救いに来たひとつのきっかけは、私の兄が独り信じて、そして仆れていった。その兄貴の信仰が私に乗り移ってきたわけです。生ける時は、私は誠に申し訳ない弟である。

人生というならば、これだけの驚くべき力と生命力に、そして一切のものを本当に展開してやまないところのこの世界に、一人びとりが造られようとしている。神さまが創造また創造してやまざるところの、その本願の中に自分を入れないで、何の人生か。私たちは神の偉大な国を来たらせるための、その一つの大事な役割を賜っているところの一人びとりで、これが神の国を建設していく。私たちの人生観は――観ではない――人生道ははっきりといたします。

どうか、皆さん、そういった本当の平安とキリストの中に深く安らってください。キリストの中に深く安らうとは、祈りの世界で深くキリストの中に自分をとっぷりと入れると、その安らいの中で力を得る。

私もさっき少し休ませてもらったから、あそこで祈って、力を得てまいりました。すべて、キリストの中に入る者は、安らうとその静中において本当の動力がくる。こないだ、浅間山の方で信州のご連中と有志で集会をした。浅間山の西の方の尾根伝いに歩いた。浅間山を見ると、今日みたいに非常に晴れた日でしたが、静かに煙を吐いている。誠に静かである。けれども、あの静けさの奥に驚くべき火を持っている。一朝事あらば爆発する。一旦緩急あれば爆発するというような力を持っている。即ち、静中に動を持っている。また、どんなに動的に動いても、その根本に本当の静かな静というものを持っている。こういう境地はこの福音を、御霊のこのような把握をしなければ出てこない。いわゆる神学をやってみたって、ただ聖書註解でいくら辻褄を合わせたって、そんなものはダメですよ。

かつて偉大な坊さんたちが仏教を掴んで、日本仏教は、鎌倉仏教が驚くべき展開を平安

の末期あたりから始まりましたけれども、仏教を掴んだ彼らに決して負けずに、日本人は今本当に聖書を受けとることです。福音の世界はその仏教をもなお包含するような驚くべきものを持っていますから。

どうか、皆さん、学問ではないですよ。学問はいくらでも、学問ある人はそれを善用できますけれども。しかし、あるなしということが問題ではない。どんな人も、その人でなければできない福音の証者となれる。その人らしき本当に福音の証者と皆さんがなって、天下一品に一人びとりがなって、それが大きなハーモニーに大きな調和をなして、キリストの栄光体となっていく。皆さん一人びとりは決してそれ以下のものではないんですから。我々は神さまに顧みられているというのは、御霊を受けたときには、もうケタ違いな質の違ったその世界に入ってください。午前に読んだコリント前書2章のところ、そういったところに限りなく入って行く。何を読みましても、本当の掴み方ができる。いわゆる学者以上になってしまう。いいですか。そういう豊かな世界に、どうか、大胆に恐れなく、楽しく喜ばしく入っていただきたいと、こう思います。ことに若い方々が、もう左顧右眄することがないように。今はもう、いろんな誘惑の多い世界ですから。

●文化の本当の根底

テレビを見たっていいよ。僕は昨日の晩、赤穂浪士の討ち入りのところを見たかったけれども汽車の中で見れなかったので残念だった。私はあのテレビは一番好きなんで、あれをじっと見ている。そうするとあの中から註解書よりか遙かに素晴らしいものを私は掴める。日本人は素晴らしい魂です。そういう先輩がいたんです。彼らは本当に己を棄てた。己を棄てていたあの四十七士です。あの己を棄てていたところの四十七士が、何といつまでも日本人にひとつの大事な精神的な宝となっているのは、やはり己を棄てている姿ではないですか。彼らは忠信に生きた。ところが、私たち、キリストにかくも愛せられ、キリストの本願を受けた者が、「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし力を尽くし」て――あの浅野内匠頭（たくみのかみ）に尽くしたところのあの四十七士の魂のように――福音を受けている者は、神の本願、キリストの本願に応えないような意気地なしのクリスチャンであったなら、キリストは、

「ご免だよ。そんな者は私のものではない。我たえて汝らを知らず」

と言われる。

日本人は本来それだけの素地を持っている。もう一遍、日本歴史を読みなおして、大事なものがそこに芽生えていることをキリストの光でもって見る。過去をもっともの凄く活かして、過去の先輩たちの悲願を、本当にキリストの本願に切り替えて、私たちはこの日本の歴史を高貴あるものにする責任を持っている。

どうか、そんなわけで、皆さん、満々たる抱負をもって――我々の悲願はキリストの本願によって成就するのです――ケチくさい考えはやめて進みましょう。私は一歩も退かな

いで進んで行く。敵は幾万ありとても絶対に退かないで進みます。それは私の自分の強がりでも何でもない。これはキリストの力が、パウロと同じものが入ってきて、それで押し出すから仕方がない。ざるを得ない世界が一番強いと申し上げているとおりです。

天的法則は必ず力を持っている。天の法則は力がある。物理法則だってちゃんと力があるでしょ。物理の世界だって、法則でみんな動いている。法則だけがただ動いているのではない。力と同時に法則が動く。風が吹けば、風が吹くという一つの力で、そこに法則があって、木の葉が動く。その動き方は数学でいくら計算しても、計算しきれないほどの厳密な動き方をしているわけだ。

私は天文学者になったら、さぞかし気宇が大きくなるだろうと思う。天文学者になりそこなって損したが。スプートニクだか何だかしらんけれども、ちょっと地球の外に出たくらいで大騒ぎしてますけれども、我々の魂は宇宙を庭とすることができるような、天文学者と同じように、なれるんです。魂がそうなったら、肉体まで、何だかしらないけれども、若返ってしまう。それは肉体には制限があるから、日々に衰えても、内なる人は日々に新たなりとパウロが言った。その通りです。

「絶対不敗のこのイエス・キリストが我らと共にあるならば、誰か我らに敵せんや」

と、パウロがロマ書8章の後半で絶叫しているでしょ。そしてまた、エペソ書3章から4章あたりで、

「このイエス・キリストの愛の高さ深さ広さのいかばかりなるかを。御霊は一つ。主は一つ。バプテスマは一つ。神さまは万物に超在し、万象に貫き、万人に内在する」

と、全部を包含するようなことを大胆にパウロは言ってます。ああいう突き抜けた福音であるのに、なぜケチくさいものにみんなしてしまったかと、私はこの頃呻いているんですよ。

どうか、皆さん、もうこの世界にどしどし入って、私よりか皆さんは若いんだから私なんかより遙かに、アベベみたいにどんどん先へ行ってください。私は殿（しんがり）でいい。しかし、私も絶対にマラソン競争は途中でやめませんから。

そういうわけで、神の国に行って、己を棄ててこそ力がある。己の十字架を負いてこそ本当にキリストの本願を受けとっている世界である。そうしたらば、赤穂義士以上の、彼らに本当に応えることのできる後輩として、更にキリストの光を、この福音を展開する。そして、福音は一切の文化を――明日の話になるけれども――一切の文化を本当に展開するところの驚くべき根底である。これは福音の他にない。はっきり言います。これでお終い。